

約束

～リラの花の咲く頃に～

東 めぐみ



【邂逅～めぐり逢い～】

莉彩（りさ）は所在なげに周囲を見回すと、そっと小さな溜息を落とす。先刻からもうこれで幾度めになるか判らない無意味な動作一腕時計を覗き込んで時間を確認するという一を繰り返した。

それでも、まだ慎吾は来ない。莉彩は今、小さな橋のたもとに立っている。名前さえ知らないささやかな流れの上に掛かる、これまた小さな小さな橋。ここは莉彩の住んでいるY町でも外れで、人通りも多くない。というよりは、はっきり言うと、昼間でも人影のあまり見当たらない寂れた場所だ。

そんなところでも、たまに犬を散歩させている老夫婦だとか、幼い子どもを連れた若い主婦などが通り過ぎる。別にその人たちが莉彩を特に気に留めているわけではないのは判っているのに、何故か、自分が白い眼で見られているような気がして居たたまれない。人は自分が考えているほど、自分のことを見てはいないし、気に掛けてもいないものだ。そのことを判っているつもりなのに、自分の傍を通り過ぎてゆく人が

—あの子、彼氏に待ちぼうけを食らわされてるんじゃない？

などと、意味深に語っているような気がしてならない。流石に腕時計を見るのは止め、今度は丁寧に結い上げた髪に触れてみる。莉彩は腰まで届くロングヘアで、普段は解き流していることが多いのだけれど、今日は後頭部で一つにまとめ、シニヨンにしている。あまりごてごてと飾りをつけるのは好きではないので、少し大ぶりの簪を一つ。

これは、莉彩の父が韓国旅行の土産に買ってきてくれたものだ。ゴールドの簪の先に、アメジストがあしらわれている。色は淡い紫、幾つかの小さな玉が集まって可憐な花を象っている。一パパ、これって一体、何の花なの？ 莉彩が訊ねると、父は笑いながら言った。一よく見てごらん。ライラックの花の形をしているだろう？

父はごく平凡な商社マンで、日本では結構名の知れたアパレルメーカーの営業部長をしている。韓国に行ったのは、社員旅行のようなもので、件（くだん）の簪を見つけたのは町の露店の店先であったという。あまり高いものではなかったのだが、何故か、その簪を見た瞬間、いざなわれるように手に取っていたそうだ。一旦那さんはなかなかお眼が高いねえ。露天商の老人は皺に埋もれた細い眼をしばたたきながら、そんなことを言った。

父はその時、老人が愛想を言っているだけだと思った。父の勤務する会社には韓国に支社も持っている。若い頃は韓国支社の駐在員を務めていたこともあるという父は、韓国語も流暢に話せたので、現地の言葉で言ってやったそうだ。

一ホウ、すると、何か特別な謂われでも？ 小柄な老人は眉も顎の下にたくわえた口髭もたっぷりとしていて、まるで山奥に棲む隠者のようだった。

一さよう、あまり大きな声では言えないが、この簪は何でもはるか昔、さる高貴なるお方の御髪（おぐし）を飾っていたといえますよ。

店主の老人によると、この簪は朝鮮王朝時代、何代めかの王の寵姫が愛用した品だとか。

むろん、現実志向の父は、そんな荒唐無稽な話を本気にはしなかった。が、たとえ口から出まかせにしても、興味はそそられた。値段も手頃だったため、その場で金を払って引き取ったのだ。

—それにしても、王の妃の持ち物だったほどの値打ち物なら、宝物館かどこかに収まっているべきものでしょう？ そのような由緒ある品が言っては失礼だが、こんな露店の店先に転がっているはずがない。あなたのお話が本当なら、この簪は今、あなたが私に提示した値段の百倍どころか値段もつけられないほどの価値があるはずですよ。品物を受け取りながら父が店主に言うと、老人は意味ありげな笑みを浮かべた。

—そう、ありえない話だ。ですがね、旦那、歴史ってものは、ただ語り継がれているだけのものがすべてとは限らないでしょう。歴史の波間に沈んでいった名も無き人だって、ごまんといたはずだ。そして、それは私らのような庶民だけではなく、雲の上のやんごとなき方々にしても同じじゃありませんか？ 陰謀や政争の犠牲となって歴史の闇に葬られたお方だって一人や二人じゃないでしょうよ。この簪は、そういったお方が身につけていらっしやったものだと聞きましたよ。

その日、父はそのまま店主に見送られ、滞在先のホテルに戻った。が、夜になって一人で考えみても、そのような因縁のあるいわくつきの簪を持っているのは止めた方が良いと思い直し、翌日、再度、その露天商を訪ねた。

だが一、何とも奇妙なことに、父が訪ねていった時、既にその露天商はいずこへともなく姿を消していた。いや、確かに昨日はそこに謎めいた老人が店を出していて、いかにも女性が歓びそうな細々としたアクセサリーを商っていたはずなのに、翌日、その界限で幾ら聞き回ってみても、そのような老人はついぞ見かけたこともないと誰もが口を揃えて言った。

では、自分はいっときの夢を見たのか。あの老人は、異国で束の間の白昼夢が見せた幻だったのだろうか。そうも思ってみたが、我が手の残された簪を見るにつけ、あの出来事が現（うつ）であったことは疑いようもない。父は結局、その簪を旅行鞆に詰め込んで帰国した。

父に簪を見せられた時、莉彩はひとめで心惹かれた。何故かは判らない。でも、じいっと見つめていると、心の奥が妖しくざわめき、鎮まっていた感情が俄に激しく根底から揺さぶられるような感じがしてならなかった。

去り際の父に、かの露天商の声が追いかけてきたという。一旦那、その簪には不思議な力があるそうですよ。思わず振り向いてしまった父に、店主は声を張り上げた。

—離れ離れになった恋人たちを引き寄せるといふ不思議な力を秘めているそうさ。もし、年頃のお嬢さんがいたら、差し上げてみては、いかがです？ それとも、どうしても忘れられない昔の恋人がいれば、旦那ご自身でお持ちになってみるのも良いかもしれませんよ？

あまりにも馬鹿馬鹿しい話に、父は今度こそ眉をつり上げ、踵を返した。離れ離れになった恋人たちを引き合わせるだなんて、これほどロマンティックなことがあるだろうか！

莉彩は父と違って、恋愛小説が大好きな母の血を受け継いでいる。不思議な露天商の話は、いたく莉彩の心を揺さぶった。父は陰謀や政争の犠牲になったというお妃の持っていたといういわくのある簪を大切な娘に与えたくはなかったようだが、莉彩は父に無理を言って簪を譲って貰った。

以来、簪は莉彩の宝物となった。この簪がライラックを象っていると露天商が言ったわけではないけれど、父はこの花の形を見た時、確信したそうだ。莉彩の父は仕事柄、若い頃から日本各地を転勤で回ってきた。莉彩が生まれた頃は丁度、北海道支社にいた。

—お前が生まれた朝は、空が眩しいくらいに澄んで蒼く輝いていて、リラの花が満開だった。ママがいる産院の部屋から、庭のリラの花がよく見えたものさ。

莉彩という名は、ライラックの別名であるリラから付けたのだと、父はよく幼い莉彩を膝に載せて懐かしげに話してくれた。自分の名前にゆかりのあるライラックの花、その花を象った簪が莉彩の手許に来たのも何かの縁なのかもしれない。

—じゃあ、パパ、この簪は相当な年代物なのね。

莉彩はリラの花を象った簪を眺めながら、父に言ったものだ。その後も、莉彩は簪を小物入れに大切にしまい込み、一人になったときには、そっと取り出して眺めた。夜、父や母が寝静まった静かな家の中で、莉彩は自分の部屋のベッドに寝っ転がってリラの花の簪をしげしげと見る。枕許のナイトスタンドの淡い照明に照らされ、キラキラと煌めくアメジストの可憐な花に魅了されたように見入った。

不思議な簪、眺めていると、心がきりきりと切なく痛み、訳もなく泣き出したくなってしまいうような。

そんな時、莉彩は自分のあまりの感傷さに笑ってしまった。多分、陰謀の犠牲となったお妃云々という秘話が、莉彩をそんな妙にセンチメンタルな気分させるのだろう。莉彩はそう思った。

それでも、この簪が本当に何百年も前、それも遠い異国の悲運の女性の艶（つや）やかな黒髪を飾ったのだとしたら、それは何とロマンティックなことだろう。父は縁起が悪い簪だといって莉彩が持っているのに良い顔をしないが、莉彩はあまり頓着しなかった。莉彩が大いに関心があったのは、お妃の辿った薄幸な宿命よりも、歴史の狭間に沈んだ彼女の数奇な人生そのものだった。

そこに、いかなるドラマがあり、どのような恋物語が存在したのか。王の寵姫だった女人であれば、王と身を灼くような烈しい恋に落ちたのか、それとも、思い合った恋人との仲を引き裂かれ、泣く泣く王の傍へ上がったのか。

この小さな、たった一本の簪に莉彩などの与り知らぬ壮大な歴史とドラマが隠されている。想像しただけで、胸躍るような気持ちだ。

きらめく簪をためす、すがめつしながら、莉彩は夜毎、果てのない空想に耽った。この簪がはるばる海を渡ってきたのだと思うと、何かとても厳粛というか荘厳な気持ちになった。 そのようないわくのある品は持ち主を選ぶと聞いたことがある。品物の方から望ましい所有者を探して、その人のところにゆくのだと。もちろん、単なる迷信には違いないだろうし、それを真実だと信じ込むほど莉彩も子どもではない。でも、この簪を眺めていると、やはり何かしらの理由があって、この簪が父の手に渡り、更に海を渡って莉彩の許に来たのだという気になってくるのも事実だった。 父の前にふいに現れ、翌日にはかき消すようにいなくなってしまったという露天商のことも気になる。

莉彩は物想いに耽りながら、ふと思いついて肩にかけたバッグからコンパクトを取り出す。薔薇の花の形をした蓋を開き、鏡を覗き込んで、額にわずかにかかった前髪を直し、再び蓋を閉めバッグに戻した。 安藤莉彩は十六歳、Y高校に通う高校一年だ。中学二年から付き合っているボーイフレンドの和泉慎吾がいるが、恋人というよりは親友とか戦友とかいった形容がぴったりだ。

むろん、慎吾からの告白を受けて付き合い出した手前、慎吾が自分に好意を抱いているのも知っている。でも、付き合い三年になるというのに、いまだにキス一つしたことがないし、せいぜいが遊園地にデートに行って手を繋いだ程度のものである。二人だけでいても、話題は学校生活が中心で互いの親友のことや、慎吾が打ち込んでいる野球部のことなど他愛ないといえれば他愛ない話ばかりで、慎吾の口から「好きだ」と言われたのは、二年前に付き合い欲しいと頼まれたそのときだけなのだから。

幾ら頼まれたとしても、もし慎吾が嫌いなら、莉彩もOKはしなかったろう。だから多分、莉彩も慎吾を嫌いではないとは思っただけけれど、今一つピンとこない。

一体、自分は慎吾をどう思っているのか。莉彩は元々、流されやすいというか、他人から頼まれたら厭とは言えない性分である。そのため、掃除当番とか日直とか、頼まれると、すぐに引き受けてしまう。

「一ね、安藤さん。私、今日は塾でどうしても早く帰らないと駄目なの。悪いけど、最後の戸締まりの点検、代わりに頼めないかな。」

目の前で両手を合わせ懇願されると、「うん、いいよ。私は特に何もないから」と笑顔で応えてしまう自分がちょっと情けない。

慎吾に言わせれば、「それが莉彩の良いところなんだよ、気にするな」と慰めてはくれるのだが、この主体性のない性格を少しは直したいと思っている莉彩だった。その頼まれると断り切れないというノリでつきあい始めてしまったといえれば、慎吾にはあまりに失礼だし申し訳ない。しかし、完全にそうではないと言い切れないところが、辛いところだ。

つまり、だ。莉彩は慎吾を顔を見るのも厭というわけではないから、頼まれて付き合い始めたが、結局のところ、彼氏だとか恋人だとかいう自分にとっての特別な存在だと思っているわけではない。一と、結論はこうなる。

その気持ちはこの三年の間も変わらなかった。莉彩としては、むしろ変わってくれた方が良かったのだ。だって、今のままの中途半端な気持ちでは、あまりに慎吾に申し訳ないではないか。付き合い始めた当初は、莉彩だって、いつかは慎吾を好きになれると思っていた。

いや、今だって慎吾のことを好きだ。でも、その「好き」は女友達の泰恵や遥香に対するのと全く同質のもので、慎吾に向ける想いが恋情だとは到底思えなかった。恐らく、それは慎吾の望む「好き」ではないだろう。

いっそのこと、慎吾に他の好きな女の子が現れれば、莉彩は気が楽なのに。なんて考えてしまう自分は、とんでもない卑怯者に違いない。自分が悪者になりたくなくて、慎吾に別の子に眼を向けて欲しいと願っている。

慎吾に真実の気持ちを伝えなければと思いながら、莉彩はついつい言えずじまいでいた。莉彩と同じ地元のY中学を卒業した後、慎吾は仲間と別れ、たった一人、私立のS高校に進学した。S高校は付属の大学もある名門男子校で、高校の野球部は毎年のように甲子園に出場し、全国大会でも何度か優勝を飾っている強豪だ。現在、慎吾は毎日往復四時間かけてS高まで通っているが、大学入学後は近くに下宿すると聞いている。

毎日遅くなるまで部活に明け暮れ、電車で揺られてY町の自宅に辿り着く頃には午後八時を回っていることが多いという。それでも愚痴や弱音一つ零さず、学校の成績も常にトップクラスだという慎吾。ルックスだってジャニーズジュニアとまではいかないけれど、そこそこ良い線はいつていると思う。少し色素の薄い茶色っぽい髪はさらさらしていて、シャンプーのコマーシャルに出られるほど綺麗だ。少し長めの前髪が額に落ちてきたのをかき上げる仕種が、格好良い、と中学では女子たちの間で熱い視線を集めていた。

むしろ、取り立てて成績も外見も良いところのない莉彩に慎吾が告白したと聞いた女子たちは、`何で?、と不思議そうに顔を見合わせたものだった。親友の泰恵と遥香ですら一慎吾、視力が悪いんとちゃう?

などと実に失礼なことを真顔で言っていた。いつだったか、莉彩が冗談に紛らわせてその話をすると、慎吾が呆れたように肩をすくめた。

一莉彩が知らないだけだろ、お前って、中学時代は男子の間で結構人気あったんだぜ? ほら、今どきの女って、皆、俺たち男より強すぎるじゃん? 活きの良いクラスの女子の中で安藤って一人だけ変わってて、何だか仔猫みたいで、ほわほわした雰囲気が良いよなとか噂してたんだ。一仔猫? なに、それ。そんなの、賞められてるのか、けなされてるのか判らないよ。莉彩が頬を膨らませると、慎吾が陽に灼けた貌を綻ばせた。

一賞め言葉だよ。莉彩、お前は自分が思ってるより、数倍も可愛いし、良い女なんだぞ。

高校に入って初めての夏休みを過ぎた頃から、これまで少年っぽさの強かった慎吾が俄に変わり始めた。莉彩なんて身長が殆ど伸びなくなって久しいのに、慎吾は半年でまた五センチほど伸びたらしい。ひよろ長かった手脚に筋肉がつき、逞しい男らしい身体つきになり、その分、顔立ちや時折見せる表情や仕種にも精悍さ、大人っぽさが増した。

莉彩でさえ、一緒にいると時折ハッとしてしまうほどの変わり様だ。慎吾は今、少年から青年への階段を駆け足で上っているところなのだ。日曜日や祝日も野球があるので、現実にはデートできるのは一ヵ月にせいぜいが一度くらい。それでも、慎吾は忙しい時間の合間を縫って、莉彩と逢う時間を作る。

一ねえ、和泉君、毎日忙しいだろうのに、たまの休みくらい家でのおんびりしたいんじゃない？ 私のことなら、気にしないで良いのよ。 莉彩が言うと、慎吾は破顔した。

一莉彩と一緒にいると、不思議と和むんだよな。癒し系っていうヤツ？ だから、家で暇持て余してるより、莉彩の顔見ての方が俺には断然良いんだよ。莉彩は俺の元気の素だから。

そう言い切ってから、ちょっと照れたように頬を赤らめた。その表情にはこの頃急速に大人びてきたとはいえ、少年らしい初々しさがほの見えた。 その時、莉彩と慎吾は丁度、遊園地にいた。くるくると回るコーヒーカップに二人して乗り込んでいたときの会話だった。その直後、慎吾の手がふっと伸びてきて、莉彩の頬に触れた。そのまま顔を引き寄せられる感覚があり、一キスされる？

一瞬、莉彩は眼を閉じた。今のこの時代に、たかだかキス一つくらいで、ここまでの覚悟（？）が必要なのかと思うほど、身体中に緊張を漲らせて次に起こるであろうことを待ち構えた。

が、いつまで経っても、慎吾の唇は重ならなかった。一もう、良いよ。莉彩、眼を開けて。その声に莉彩が恐る恐る瞳を開くと、慎吾が苦笑を浮かべていた。

一莉彩ったら、まるでこれから何かの宣告を受けるみたいに悲壮な顔するんだものな。

一ごめん、和泉君。私、そんなつもりじゃー。 申し訳なさで思わず泣きそうになった莉彩の頭をくしゃくしゃと撫でて、慎吾が屈託なく笑った。

一莉彩の気持ちは判ってるよ。良いから、気にするなって。また、今度な。

慎吾はいつだって優しい。だけど、いつまでも、この優しさに甘えっ放しで良いはずがない。今のままだと、慎吾の優しさを利用しているようで、自分が許せなかった。

一度、慎吾に今の自分の気持ちをはっきりと打ち明けた方が良いのかもしれない。しばらく一定の距離と時間をおいて、一人でゆっくりと考えてみたいのだ。慎吾と離れた時間を過ごした後、それでも自分の気持ちが今と変わらなければ、そのときは哀しいけれど、慎吾とはもう逢わない方が良いのだろう。

やはり慎吾とは離れていたくない、これからも今までのように逢いたいと思えば、莉彩は慎吾を必要としていることになる。そのときは、莉彩は慎吾が自分にとって何にも代えがたい大切な人だと知るはずだ。

言いにくいことではあるが、今一いや、これからの二人にとっては大切なことだし、言わなければならないことでもある。今日、莉彩は慎吾にそのことを話すつもりでいた。

それにしても、慎吾は遅い。いつもなら、莉彩よりも早くに来て待っているはずなのに、何か来る途中であったのだろうか。それとも、急用でも？　だが、慎吾は几帳面な男だ。急用ができれば、必ず電話が入るだろう。もしかして、やはり途中で事故にでも遭ったのか。

莉彩は焦燥感に駆られ、元来た道を引き返し始めた。舗装はしてあるものの、細い道は車一台がやっと通り抜けられるほどの広さしかない。しばらく家も何もない道をゆくと、ぽつぽつと小さな店が見え始める。一応〃〇〇商店街、となってはいるけれど、どう見ても商店街のようには見えず全く客が入っていない店ばかりで、おまけにシャッターを閉めたままのところも目立つ。

莉彩の家はここから徒歩十五分くらいで、比較的民家の集まった閑静な住宅地といった雰囲気だ。少なくとも、今いる場所よりは数倍、都会的な場所である。では何故、二人の待ち合わせ場所がこんなへんぴところなのかといえば、慎吾がいつも高校の部活を終えてすぐに逢いにくるためだ。この商店街は駅のすぐ傍にあるのである。　慎吾は日曜は午前中、朝練をこなし、それが終わると電車で飛び乗りY町まで帰ってくるのだ。二時間も電車で揺られて。　疲れていることが多いのだろう。

一電車に乗ってるときは、いつも居眠りしてるよ。お陰で、車掌さんに顔憶えられてさ。毎日、よくそんなに寝てられるねって、嫌味かどうか判らない科白を言われたよ。

と、頭をかいていたっけ。

「莉彩！」 聞き慣れた声がして、莉彩は顔を綻ばせた。

見れば、慎吾が前方からしきりに手を振っていた。莉彩からすると、慎吾は道の斜向かいに立っている。丁度、二人の間の距離は十メートルほどあるだろう。 莉彩は顔を輝かせて、道を横切ろうとした。

そのときだった。 プッブーと烈しいクラクションが鳴り響き、莉彩は硬直した。 厭な予感に打ち震えながら顔を上げると、狭い道の向こうから一台の車が走ってくるのが眼に入った。

「ー！」 莉彩は息を呑んだ。 白のセダンが唸りを上げながら物凄いスピードでやって来る。 猛り狂う飢えた猛獣のような勢いでこちらに突っ込んでくる。 普段、この道をそのような気遣いじみたスピードで走行する車はない。 大体、車自体があまり通らないのだ。 この道に多少なりとも人通りがあるのは、近くのY駅に電車が着いたときくらいのものだ。

「ああっ」

莉彩が叫び声を上げたのと、誰かの逞しい腕が莉彩を抱き止めたのは、ほぼ同時のことだ。 一もう、駄目。 莉彩は固く眼を瞑った。

自分はこのまま車に轢かれて、死んでしまうのだ。 十六年しか生きられなくて、しかもこんな亡くなり方をするなんて、何という親不孝者なんだろう。 脳裡を嘆く両親の姿がよぎる。 人前で感情を露わにすることのない父はぐっと歯を食いしばるだろうし、涙脆い母は感情を抑えられず、人眼もはばからず泣くだろう。 遠くで慎吾の呼び声が聞こえていたようにも思うけれど、莉彩には定かではなかった。 ただ、自分をしっかりと両腕で守るように抱え込んでくれたそのひとの力強さだけは、ちゃんと憶えていた。

莉彩を轢こうとしたセダンが相変わらずの猛スピードで走り去った後、慎吾は茫然とその場に立ち尽くしていた。「嘘ーだろ」

慎吾は我知らず呟いた。 思わず自分の頬をギュッとつねってみる。

それから一度眼を閉じて、更にゆっくりと開いてみても、現実は何も変わらなかった。 そんな馬鹿なことがあるはずもない。莉彩がたった今、通り過ぎたあの車に轢かれそうになったのを、自分は確かにこの眼で見た。

時間にすれば、ほんの数分どころか、何十秒というわずかな間の出来事だったろう。その間に、確かにそこにいたはずの少女が突然、姿を消してしまうなんて。

それとも、自分は何か悪い夢でも見ていたのだろうか。莉彩に逢いたい一心で心逸っていたから、ありもしない幻影でも見たというのだろうか。 だが、既に時間は午後三時を回っている。莉彩との約束の時間は二時半だった。莉彩の性格からして、この時間になって待ち合わせ場所に来ていないことは考えられない。 慎吾は取るものもとりあえず、待ち合わせ場所の橋のたもとへ向かった。しかし、そこにも莉彩の姿はなかった。 慎吾は夏でもないのに、背中に冷たい汗が滲むのを感じた。莉彩は危機一髪で車に轢かれるところだった。それを考えれば、むしろ、自分が見たあの怖ろしい光景が夢であった方が都合が良いのは判っている。

でもー。慎吾には何故か素直に歓べなかった。 あれは断じて夢などではない。紛れもない現実のはずだ。だとすれば、莉彩は一体、どこに行ったのだろうか。 安藤莉彩が突如としてこの世から姿を消した一後に、`高一少女、謎の行方不明、とニュースや新聞でも取り上げられた失跡事件の始まりだった。 後にその時、セダンを運転していた初老の男も警察で事情を聴取されることになったものの、彼の言い分もまた 一道を横切ろうとして車の前に現れた少女が忽然とかき消すように姿を消した。 と、その一点張りだった。 警察から任意出頭を求められるまで、その男性は少女があまりにも劇的に消えてしまったので、慎吾同様、悪い夢を見たと思い込んでいた

。

事件の目撃者はたった二人、セダンを運転していた男と失踪した少女のボーイフレンドだという少年だったが、やはり、彼も莉彩が目の前で突然、いなくなったのだと語った。

一まるで空間が割れて、その隙間にすっぽりと吸い込まれてしまったような感じでした。真顔で語った少年は、当初、警察では正気を疑われ、拳げ句に彼が少女拉致もしくは誘拐と拘わりあるのではと疑われもしたが、後に彼は事件とは無関係だと証明された。SFを読み過ぎの妄想癖のある少年のたわ言で片付けることはできなかった。何しろ、彼ともう一人、分別盛りの大人が同じことを供述しているのだから。警察では多数の捜査員を動員して安藤莉彩の捜索が続けられたが、数日を経ても依然として少女の行方は判らずじまいだった。

十月半ばの薄曇りの日の出来事で、その夜はまるで空が泣くように雨が降り始めた一。

一もう、駄目。固く眼を閉じた莉彩がいよいよ最期の瞬間が来るのを覚悟したその時、力強い腕が莉彩を抱きしめた。「危ないッ」若い男のように聞こえる声は、しかし、聞き慣れた慎吾のものではなかった。それでもまだ、莉彩は眼を開けられなかった。恐怖のあまり、身体は震え、身体中に冷や汗が滲んだ。だが、予想に反して、その瞬間、は一向に訪れなかった。更に幾ばくかの刻が経過した。莉彩にとっては果てしない長さのように思われたが、現実にはたいした時間ではなかったはずだ。なおも現実を避けようとするかのように眼を閉じ続ける莉彩の髪をそっと撫でる手のひらがあった。

「もう、大丈夫だ」

深い、心に滲み入るような声音に、莉彩はそっと眼を開く。視界に映じたのは、見知らぬ男の貌であった。年の頃は三十そこそこくらい、抱きしめられた腕の感触は逞しいという形容がぴったりだったけれど、顔立ちは存外に整っている。いや、整っているどころではない。そこら辺にいる並の女よりはよほど美しいと思えるであろう端整な風貌であった。かといって柔弱な優男といった印象ではなく、精悍さと優美さが絶妙のバランスで調和した天性の美貌である。莉彩も女性にしては背の高い方だという自覚はあるが、男は更に頭一つ分高い。百六十センチの莉彩がはるかに見上げるほどだから、ゆうに百七十五はあるに違いない。

ふいに違和感を憶える。 莉彩の視線が男の全身を忙しく辿った。

男は帽子を被っているが、現代ではあまり見かけないタイプのものだ。強いていえば形そのものはシルクハットに似ていないこともないが、顎の部分（顎紐が来る場所）に、紐の代わりに玉を連ねたような首飾り状のものがついている。更に男の着ている服は何とも奇妙というか珍妙だった。 これも見かけは着物に似た丈の長い上衣をゆったりと羽織り、その下には白の下着（上下に分かれているようだ）を纏っている。

—この服装は、どこかで見たことがある。

莉彩は首をひねった。記憶を手繰り寄せようとしても、なかなか思い出せない。そんな莉彩の耳を突如として怒声が突いた。

「一体、どういう了見なのだ！ 天下の往来をそのように気の狂った猪のように無茶苦茶に走ってくるとは正気の沙汰とは思えぬ」

ハッと我に返ると、先ほどの男が腕組みをして仁王立ちになっている。その真ん前には荷馬車が一台、立ち往生していた。男は丁度、その行く手を塞いでいるようにも見える。

「お、お許し下さいませ。私は様々な布を扱う商人にございます。商品の納期がかれこれ数日近く滞っておりまして、一刻の猶予もない状態だったのでございます」 荷馬車を駆っていたかと思われる男は、老人だった。白髪に豊かな眉、顎髭ともに雪のように白く、どことなく仙人とはこういう風貌をした人なのではないかと思えてくる。 幾多の風雪を経てきたことが、彼の面に刻まれた無数の皺で判る。

「そのようなことは言い訳にはならぬ。そなたはひと一人の生命を奪うところだったのだぞ！ もし私が助けなければ、この女人は間違いなくお前の操るこの車に轢かれていたはずだ」

男は怒気を含んだ声で鋭く指摘すると、莉彩を振り返った。「幸運にも事なきを得たゆえ良かったようなものを、万が一にもこの女人を轢いていたら、何とする」

老人はその場に這いつくばった。

「そのことは十分に承知しておりましてございます。不注意はこうして伏してお詫び申し上げます。されど、私どもも生きておるのでございます。この商品が定められた刻限に間に合わなければ、一家揃って首を括る羽目になるところでございました。商いをせねば、明日、いや今日の米さえ買えぬほど貧しい者の苦勞が畏れながら、あなたさまのような生まれながらの両班（ヤンバン）のお方にお判りになるはずがございませぬ」

頭を地面にこすりつけながらも、老人は怖れも知らず訴え続ける。 男が唸った。

「無礼者めが。自らの過ちを殊勝に認めるところか、そのような聞き苦しい言い訳をするとは」
老人の物言いは、男の怒りを更に募らせたようだ。端正な貌を朱に染める男に、莉彩は首を振った。

「どこのお方かは存じませんが、危機をお救い下さったことに心からお礼を申し上げます。でも、見れば、あちらの荷馬車を轢いていた人はお年寄りです。もうどうかそれ以上、お怒りにならないで下さい」

「さりながら、あの者はそなたの生命を奪おうとしたのだぞ？ そなたが九死に一生を得たのは単に運が良かったからにすぎぬ。大方の場合、このようなときには荷車に当たっていただろう。そうなれば、そなたは今頃、物言わぬ骸となり果て、道端に転がっているところだ。そのように容易く許しても良いのか」

男の怒りも言い分も道理だ。しかし、どう見ても齢七十を過ぎた老翁が頭ごなしに怒鳴られているのは忍びない。「この人の言うことも、理屈としては間違いはありません。生きるためには人間は皆、働かねばならないし、もし今日、品物が間に合わなければ、一家全員が路頭に迷うことに一」

そこまで言って、莉彩はハッとした。「お爺さん、あなたはここでこんな言い合いをしている場合ではないのでしょ？ 早くにその荷車に積んだ商品を取り引き先に納めないと駄目なんですよ」

「仰せのとおりでございます。慈悲深いお嬢さま」

老翁は低頭したまま言い、ふと顔を上げた。莉彩を見た老翁の細い眼が見開かれる。皺深い面に「おや、という表情がひろがった。

「お前さんは一」

しかし、生憎と莉彩には見憶えのない顔だ。「どこかでお逢いしましたか？」 莉彩が小首を傾げると、老人はじいっと彼女の顔を見つめた。ぐっと近づき顔を覗き込む。眦の皺に埋もれた細い眼（まなこ）の奥に鋭い光が閃いた。一介の商人というよりは、あたかも人相見のような人の心の奥底を見透かす視線だ。

思わず後ずさった莉彩を守るように、男が老人の前に立ちはだかった。

「そんなにご心配なさいませぬ。私は賤しい身分にはございますが、これでも少しは人相見のようなことも致しましてな、興味を引かれたお方の観相をすることがございます」

老人はかすかに眼をまたたかせた。 その細い瞳が再び穏やかさを取り戻す。

「ホウ、それでは、そなたはこの娘に興味を持ったと申すのか？」 老人の言葉に、男もまた興をそそられたようであった。 ホッと胸を撫で降ろす莉彩に、老人はにこやかに告げた。

「実に珍しい相をなさっております」

「というと？」

勢い込む男に、老人は更に莉彩の顔をじっと見つめる。真正面からだけではなく、あらゆる角度から吟味するように眺めた。その両眼に再び鋭い光が戻っている。

「フム、やはり、そうございましたか」

老人は一人で納得したように頷き、今度は男に向き直った。

「観相はあくまでも人相を観るものであり、私は占い師ではございません。時に私が告げたことが、その方のこれからの一生を左右するときもございませぬ。ゆえに、申し訳ございませぬが、今、ここでその内容をお教えすることはできかねます」

「人生を左右するほどの重大事なら、尚更、当人に告げるべきではないのか。もし、今後、その身に起こり得ることが予め予見できれば、不幸を回避することができる」

男が食い下がる。老翁は穏やかな表情で緩やかに首を振った。

「もし明日、自分に不幸が降りかかると知れば、その人は心穏やかに過ごせるでしょうか。旦那さま、私の告げる未来は、恐らくは誰にも一天でさえもが変えることはできぬものです。人には知らなくても良いこともございませぬのう」「では、そなたは、この女人に近々、不幸が降りかかると、そう申すのだな」

念を押すように言う男に、老人は笑った。「いいえ、私はけして、そのようなことは申してはおりませぬですよ、旦那さま。ただ、そのお嬢さまにとっては知らなくても良いことですから、申し上げる必要はないと言っているだけでございます。ええ、知る必要なぞ、さらさらございませぬとも。そちらのお嬢さまにも、旦那さまご自身にも」

何かこの老人に訊ねなければならないことがあるような気がして、莉彩は口を開いた。

「あの」 老人が頷きながら、笑みを浮かべた。

「はるかな時を越えておいでになったお優しいお嬢さま。どうか、今、御髪に挿している簪を大切にさせていただきますように。その簪は、お嬢さまとあちらの世界を繋ぐための大切な鍵でございますよ。そして、私からの忠言でございますが、今度、めぐり逢われるお方の手を二度とお放しなさいませぬ。先刻、私は未来を変えることはできぬと申し上げましたが、後世の歴史で語られている出来事なぞ所詮は勝者の都合良きように作られたものがございます。真実は存外に史書では語られぬことが多い。ゆえに、歴史の表舞台から去っても、裏側で逞しく生きていった人たちもいるでしょう。折角、天が再び引き合わせて下されるのですから、そのご縁を大切に下さって下さい」

「それでは、そのいずれ再会するはずだというお方は、今、どこにいらっしゃるのか一、せめてそれだけでも教えて下さいますか？」

莉彩が懸命な面持ちで問うても、老人は首を振った。

「時がいずれ、示して下さいますでしょう」

老人は深々と莉彩に頭を下げ、更に男にも頭を下げた。

「それでは、私はこれにて失礼致します」

小柄な老翁は御者台に戻ると、荷車を引いて悠々と去っていった。もし、ここに莉彩の父がいたとしたら、恐らく腰を抜かしたに違いない。何故、現代の韓国にいたはずの町の露天商が五百年も前の朝鮮に存在するのだと更に混乱を来すだろう。愕くべきことに、この老翁は紛れもなく莉彩の父にリラの花簪を売りつけた露天商だった。だが、莉彩がそのようなことを知るはずもない。

「全く食えない爺さんだ。あのような怪しげな爺さんの申したことなぞ、気にすることはなからう」

莉彩が考へに沈んでいると、男が慰めるような口調で声をかけてきた。その時初めて、改めて莉彩は自分を取り巻く周囲の異常さに気付いた。自分を助けた男の纏っている服、先ほどの老人の格好一、すべてが現代のものとは違う。いや、この二人だけではない。往来を時折行き過ぎる通行人は皆、この二人と似たような格好をしていて、その身なりは莉彩がよく知っている二十一世紀の日本のものとは全く違うのだ。

莉彩は眼の前の男をよくよく見た。この服装は確か一。李氏朝鮮時代の人の格好ではないのか。よく韓流ドラマなどで見かけるもので、今、現実には莉彩の前を通り過ぎてゆく人たちは貴賤の差はあれども皆、似たり寄ったり、つまりドラマで見るような身なりをしている。

「う、嘘だわ」

「そうだ、嘘に決まっている。あんな怪しい爺さんの申した嘘など気にせずに一」
言いかけた男の前で、莉彩は思わず両手で顔を覆った。

「一体、何なの？ 突然、こんな時代に引っ張り込まれて、しかも、ここは日本でもなくて遠い韓国だなんて」 いや、この時代は韓国という国名さえなく、朝鮮と呼ばれていた。莉彩は自分の頬をピシャリと叩いた。

「そうだ、こんなのは悪い冗談に決まっているではないか。手の込んだできすぎたドッキリカメラか、さもなければ、韓流ドラマの撮影ロケに紛れ込んでしまったかのどちらかだ。 現実にタイムトリップなんて、この世にあるはずがないのだから。 莉彩は必死に自分に言い聞かせた。

「おい、しっかりしろ、気は確かか？ 頭はどこも打ってないし、見た目は怪我をしてるようには見えんがな」 男が莉彩の眼の前で手のひらをひらひらと振って見せた。

「失礼ね、私は正気も正気、気違いなんかしゃありません。助けて貰ったお礼は言いますけど、もしかして、さっきのお爺さんや私が荷車に轢かれそうになったのも芝居の一部じゃないの？」

莉彩の剣幕に、男が鼻白む。

「あの爺さんといい、この女といい、今日は何とも無礼な奴らばかりに遭遇するようだ。全くついてない一日になってしまった。私の方こそ、爺さんに観相して貰った方が良かったかもしれぬ」

「助けて頂いて、ありがとうございました。それじゃあ、ごきげんよう」

怒りまくる男を後に、莉彩がさっさと歩き出そうとする。いつまでも、こんな質の悪い茶番に付き合ってなんかいられるものか。監督がどこにいるかは知らないけれど、一刻も早く見つけ出して何とかして貰わないといけない。

莉彩が焦りにも似た気持ちで先を急ごうとすると、背後から男の声が追いかけてきた。

「おい、一体どこにゆくつもりなんだ？」

「放っておいて。こんな馬鹿げたことは、すぐに止めて貰いたい、ただそれだけ」 莉彩は振り向こうともせず、歩き続ける。

途中で向こうから歩いてきた若い男とぶつかりそうになり、物凄い顔で睨まれた。身なりが粗末なものだから、庶民なのだろう。職人風のその男は、莉彩の連れが高貴な身分の男らしいと判り、絡んでくることもなく舌打ちして通り過ぎていった。

「良い加減にしないか。どこに行くか当てはあるのか？ 闇雲に歩き回ったって、どうにもならないぞ。それとも、また荷馬車にぶつかりそうになりたいとでも？」

莉彩の歩みがふいに止まった。弾みで、後ろから付いてきた男が莉彩の背中にぶつかりそうになる。莉彩は、くるりと振り向いた。

「ねえ、これは悪い夢ではないの？ 私、どうかしちゃったのかな。信じて貰えないかもしれないけど、私が住んでいた世界は、ここじゃないのよ。ここは一韓国、ううん朝鮮でしょ？ 今は何年くらいで、この時代を治めている王さまは誰なのかしら」

莉彩もこの事態が次第に現実らしいと認識し始めていた。いや、本当はまだ信じたくはないのだが、行けども行けども、周囲の光景は変わることはなく、人々の身なりはすべて韓流時代ドラマの中のような。それに、ロケにしては、あまりにもよくできすぎているし、夢にしてはリアルすぎる。

「そなたの申すことは、まるで謎解きか暗号のような。私には皆目判らぬ。だが、そなたが記憶喪失でゆく当てがない娘であることは判った」

男の眼には憐れみが浮かんでいる。莉彩はムツとした。

「冗談じゃないわ。私は記憶を失ってなんかいません。名前は安藤莉彩、二十一世紀の日本から来た正真正銘の日本人です」

「日本とは倭国のことか？」

「倭国、この時代にはそんな風に呼ばれていたのね。ごめんなさい、私、歴史はあまり詳しくないの。卑弥呼の時代に日本が倭と名乗っていたことくらいは知ってるけど」

こんなことなら、真面目に日本史や世界史を勉強しておけば良いと本気で後悔してしまった。

「とにかく、私の知り合いの家に案内しよう。その珍妙な服はあまりにも目立ちすぎる」 男のまなざしにはあからさまな好奇心があった。

今日は慎吾と一ヵ月ぶりに逢う約束をしていたのだ。莉彩は精一杯、おめかししてきたつもりだった。アイボリーのコットンのカットソーにざっくりとした薄手のニットのチュニック。チュニックの色はパステルピンクで決めてみた。ボトムは膝より少し上のフレアスカートで紺地に白い小花が散っている。オーガンジーのふんわりとした生地が優雅さを出してくれる。

「その、何というか、珍しいだけでなく、あまりに刺激的だ」

男の視線が莉彩の剥き出しになった、すんなりとした白い脚に注がれている。現代ではこれが普通で、特に刺激的などではないが、はるか昔の朝鮮王朝時代では確かにそう言われても仕方ない。

「眼のやり場に困るのだ」

そういえば、先刻、ぶつかりそうになった若い男もいやにじろじろと脚の方ばかり見ているなと気になっていたけれど、まさか、この格好が刺激的すぎるからだとは思わなかった。

「私が生きる時代では、これが普通なのに」

国ばかりか、時代まで違うとなれば、見るもの聞くものすべてが違って当然。とはいえ、あまりにも苛酷すぎる現実に、莉彩は思わず涙が滲んできた。

「どうした、泣いているのか？」 男の声音に狼狽が混じった。

「いや、済まなかった。悪気があったわけではないのだが、そのような目立つなりをしていると、そなたの身の危険にもなるゆえ、申したのだ」

男は莉彩の手を掴んだ。

「とにかく、早く行こう」

確かに莉彩の格好は、道行く人の興味の対象となるらしく、殊に男たちの視線は莉彩の脚許に釘付けになっている。男に半ば引っ張られるようにして連れてゆかれたのは、町中にある立派な屋敷だった。

これもまたドラマに登場するような代表的な朝鮮時代の建築で、塀にぐるりと四方を囲まれた屋敷には両開きの門があり、そこから邸内に入るようになっている。屋敷の扉や柱のあちこちに「寿永長福、とか書かれた縁起の良いお札が貼り付けてある。男の身なりから、相当の地位にある人だろうとは察しをつけていたが、このような立派な屋敷に住まう知り合いを持つからには、やはり男自身も身分のある人物なのだろう。

「臨尚宮（イムサングン）、臨尚宮」

男が声高に呼ばわると、ほどなく屋敷内から一人の女性が現れた。

「まあ、これはチュー」

言いかけた女性に向かい、男はシッと人さし指を唇に当てた。

「莉彩（イチエ）。この者は、かつて私の乳母を務めていた者で、臨淑妍（イムスクヨ）という。信頼できる人だから、ここにいる間は何でも相談すれば良い」

男は気軽に女性を紹介すると、淑妍に言った。

「少し部屋を借りたい。後は、この娘に何か着るものを適当に準備してやってくれ」

「畏まりました（イエ）」

淑妍は頷き、侍女を呼ぶと、二人を部屋に案内するように言いつけた。通された先は、ゆうに十畳の広さはある室であった。

蓮の花が墨絵で描かれた衝立や、色目も鮮やかな座椅子は、やはりこの世界が紛れもなくかつて栄えた華やかな王朝時代であることを物語っている。両開きの扉が静かに閉まり、侍女が去ってゆくのを見届けた上で、男が口を開いた。

「莉彩、そなたの身の上話をもう少し詳しく聞かせてくれぬか」

上座に座った男から少し離れた場所に向かい合うような形で、莉彩は座った。その時、先刻の若い侍女が再び戻ってきて、莉彩は別室に案内される。そこで侍女に手伝って貰い、用意された衣裳に着替えた。

眼の前の大きな鏡に映ったのは、まるで見たこともない少女だった。チマチョゴリと呼ばれる韓国の民族衣装で、これも時代劇でよく見るものだ。白地に大きめの紅や黄色の花が散ったチョゴリに、下のチマは紫に近い濃いピンク。チマには全体的に桜の花に似た模様が織り出されている。

うっすらと化粧まで施された。髪は特に直す必要がないと言われ、そのままにしておくことになった。元々、韓国人と日本人は外国人同士とはいえ、外見的には全く区別がつかない。だから、こうしてこの時代の女性の衣裳を着ると、元からこの世界で暮らしていた人間のようにしか見えない。

用意が調い、侍女に案内され再び元の室に戻った。

「ホウ、見違えたな」

莉彩を見るなり、男が眼を瞞った。

莉彩自身はあまり見たことはないけれど、莉彩の母は大の韓流ファンで、月に数本はDVDを観る。母が夢中になって観ているのを傍で見たことがあって、その時代の女性の座り方も臙げながら記憶にあった。

何とか見様見真似で片膝を立てて座ると、男は声を上げて笑った。

「何だ、座り方も堂に入っているな」

愉しげに笑う男を前に、莉彩は小さく息を吸い込む。

「先ほどの話だけど」

莉彩が言いかけると、男がずっと表情を引きしめた。

何から説明すれば良いのだろう。莉彩は少し躊躇った末、訥々と話し始めた。

「私はこの時代の人間ではないの。その、何と云えばよいのか、多分、タイムトリップが起こってしまって、一時的に自分の住む時代からこの時代に飛ばされてしまったんだと思う」

「たいむとりっぷ？」

男が初めて文字を憶える子どものような顔で繰り返す。

「そう、タイムトリップ」

莉彩は少し考え、言い換えた。

「あなたに理解しやすいように言えば、時間旅行といった方が良いかもしれない。その言葉のとおり、時間一即ち、幾つもの時代の流れを船に乗って旅してきて、たまたまこの時代に辿り着いたということかしら」

「理論的には判るが、俄には信じがたい話だ」

男が首を振った。

「つまり、そなたが生きていた時代は、私たちの生きる時代よりも更に先の時代、未来ということか？」 「そういうことになるわね。私は、あなたよりもはるか先、気の遠くなるような未来から来た人間。もちろん、私も最初は何かの冗談かと思ったけれど、どうやら、これが現実みたい」

莉彩は力なく笑った。またしても涙が溢れそうになってくる。

「泣くな。そなたがこの時代にいる限り、私はできるだけのことをしよう。住む場所も何もかも心配はしなくて良い。だから、そのように暗い顔をするな」

男の言葉には心からの労りがこもっている。

「ありがとう。あなたには助けて貰ってばかりね。タイムトリップの話なんかしても、絶対に信じて貰えないと思っていたのに、信じてくれる人にめぐり逢えて良かった」

莉彩の眼から、とうとう堪え切れずに涙が零れた。一度溢れ出した涙は、なかなか止まらない。

莉彩は泣きながら、ここに来ることになった経緯（いきさつ）を話した。

二十一世紀の日本にいたときも、やはり、走ってくる車に轢かれそうになり、その寸前で時を飛んだこと。

「車が眼の前まで迫って、もう駄目だって思った時、誰かが私の腕を掴んで引っ張ってくれたの。私は、それが近くにいた私の友達だと思ったんだけど、本当はあなただったのね」

恐らく、男が莉彩の腕を掴んだその瞬間、こちら（朝鮮王朝時代）の時空とあちら（二十一世紀の日本）の時空が重なったのだろう。莉彩はそのまま、この時代に生きる男に導かれ、ここにやって来た。全くSF映画でも観ているようだが、この世にはまだまだ科学では解き明かされていない謎が幾多もある。全くあり得ないことではないのかもしれない。

「友達一、友達が一緒だったのか？」

問われ、莉彩は頷いた。

「中学時代のクラスメート。ああ、こんなこと言っても、判らないわよね。ええと、どう言えば良いのかしら、同じ学校で一緒に学ぶ友達。今は違う学校に通ってるけど、野球をしてるの。物凄く強いよ、和泉君ほどの剛速球を投げる高校生ピッチャーなんて、そうそういないんだから」

「野球？ 剛速球？ ピッチャー？」

男が首を傾げる。

「ああ、ごめんなさい。判り易く言うと、野球というのは、長い棒で玉を打つ競技なの。和泉君はその野球がとても強いよ。敵のチームの誰一人として打てないような速い球を投げる事ができるの」

莉彩が夢中で話していたのを、男が遮った。

「もう、良い。和泉というのは、男なのか」

「えー」

莉彩が眼を見開いた。

「普通、女はそのような競技はせぬからな。もしかして、男かと思うて訊いてみた」

何故だか男は憮然として言う。

「その男は、そなたの何だ。恋人なのか？」

あまりにも単刀直入な質問に、莉彩は言葉を失ってしまった。

「恋人一、なのかしら。判らない」

莉彩自身、その日、慎吾に告げるはずだった。しばらく冷却期間を置いて、互いにこれからのことを考えてみないかと言うつもりで、あの場所に行ったのだ。でも、予期せぬ事態が起こり、莉彩はこうして時を越えて、はるか昔の朝鮮に来てしまった一。

今、眼前の男に慎吾が恋人だと胸を張って言えたなら、莉彩はこんなにも悩む必要はなかったろう。

思い悩む莉彩を見る男の瞳は複雑そうだった。もとより、うつむいたままの莉彩に男の表情は全く見えなかったのだが。

「そなたは、やはり、自分が住んでいた時代に戻りたいのであろうな」

その言葉に、ひとたびは止まっていた涙が再び溢れ出す。

「帰りたい。帰りたいに決まってるじゃない。だって、ここにいる人は私の全然知らない人ばかりなのよ？ 考え方も服装も、生活様式、習慣もすべてが違うんだもの。それに、日本じゃなくて違う国だし」

何故、タイムトリップするにしても、日本ではなく、朝鮮だったのだろうか。わざわざここに自分が来たのには何か理由が一天の意思が動いているのだろうか。不思議なことはもう一つあった。

莉彩は、そのことを男に話した。

この時代で頼れる人は今のところ、この男しかいない。生命を助けて貰ったし、何より悪い人ではなさそうだ。今はこの男には話せることは話しておいた方が良いと思ったのだ。

それは、言葉の問題だ。この時代に飛ばされてきたその瞬間から、莉彩は男の話す言葉だけでなく、ここの人々が話す内容がすべて理解できた。莉彩の父は韓国語が堪能だが、莉彩自身はてんで駄目だ。それなのに、まるで生まれながらの韓国人のようにハングルを自在に操ることができる。それは時間旅行者（タイムトラベラー）の莉彩には助かったけれど、これもまた不思議といえは不思議な現象の一つであった。「確かに不思議なこともあるものだ」男は素直に頷いた。莉彩がいちばん嬉しかったのは、男が莉彩の話を茶化したりせず最後まできちんと耳を傾けてくれたことだった。大抵の人ならば、莉彩を端から気遣い扱いするのがオチだろうに、この男はちゃんと莉彩に向き合い、真剣なまなざしで語り適切なアドバイスをくれようとしている。しばらくして、男はそろそろ家に戻らねばならないと言って、帰っていった。

部屋を出ようとした男の背に、莉彩は思い切って声をかけた。

「さっきは、ごめんなさい。帰りたいのかって訊かれた時、つい感情的になってしまって。あなたはこの国のこの時代に住む人なのに、その人の前であんなに取り乱すべきではなかったと思うの。だって、この時代には、あなたのように親切で優しい人だっているんだもの」

男が口を開きかけ、少し逡巡を見せた。

「そなたが帰りたいと願うのは、やはりー」

が、男は薄く笑い、首を振った。

「いや、止めよう。莉彩、先刻紹介した臨尚宮は私の母（オモニ）も同然の人だ。そなたのいた時代に帰ることができるその日まで、遠慮なく暮らしなさい」

茫然とする莉彩の前で、扉が静かに閉まった。

一人だけの結婚式

【一人だけの結婚式】

男の言葉どおり、臨尚宮は心優しい女性であった。臨淑妍は、男の乳母だという話もどうやら真実（ほんとう）のようだった。莉彩が身を寄せることになった屋敷は正確には淑妍のものではなく、その弟の臨内官（イムネガン）の所有であり、内官とは宦官のことを指すのだとも初めて知った。

内官は王の住まう宮殿に侍し、公私にわたって王の傍にいてご用を務める。ゆえに王の後妃に接する機会も多く、去勢した宦官でなければならないという掟があった。

若くして内官になったときから、既に去勢しているため、妻帯はしても形ばかりで子をなすことはできない。そのため、内官は皆、養子を迎えて家門を継がせるのが通例となっている。

臨内官にも奥方はいるが、実子はおらず、数年前に若く優秀な内官を養嗣子として迎え入れたそう。淑妍は、莉彩を客人としてもてなしたが、莉彩は自分から頼み込んで屋敷内で侍女として働いた。掃除、洗濯、元々、身体を動かすのは嫌いではない。それに、何かしていれば、ともすれば沈みそうになる心を何とか保っていられる。

「そんなことをさせては、私があの方に叱られてしまいますから」

淑妍が真顔で止めても、莉彩は毎朝、山のような洗濯物を抱えて井戸までゆき、大勢の侍女に混じって厨房で立ち働いた。

あの方というのが例の男一莉彩を助けてくれた男であることは判った。そういえば、莉彩はいまだに男の名前も知らない。淑妍に訊ねても、「それは、あの方ご自身がいずれ明かされるでしょう、としか言わない。そんなある日の夜、莉彩が自室で寛いでいると、外側から声がかかった。

「入ってもよろしいかしら」

「ええ（イエ）、どうぞ」

莉彩に与えられたのは、初めてこの屋敷に来た日に通された室である。夕餉までは忙しく立ち働く莉彩であったが、この部屋で一人早めの夕飯を済ませた後は、特にすることはない。

「秋の夜長に少し話でもしようかと思って」

淑妍はそう言って、上座に座る。座椅子に座っていた莉彩は淑妍に席を譲り、やや下手に座った。

「今、お茶を淹れますね」

この香草茶は臨家が特別に領地内にある産地から取り寄せているお茶で、淹れ方にはコツが要る。淑妍に教えられ、莉彩はすぐに淹れ方を憶えた。

「お伺いしても良いでしょうか」

莉彩の淹れた香草茶を美味そうに飲む淑妍に、莉彩は問うた。

「何なりと、私のお応えできることならば飲んで」

淑妍は莉彩を気に入ってくれたようで、まるで実の娘のように可愛がった。

「淑妍さまは、あの方から臨尚宮と呼ばれていらっしゃるようですが、尚宮というのは後宮で働く偉い女官のことじゃないですか？」

いつしか莉彩もあの男を「あの方」と呼ぶようになっていた。名前を知らないのだから、他に呼びようがない。韓流ドラマ好きの母親の影響もあってか、その程度の知識なら持っている。

「ええ、そうですよ」

淑妍が微笑んで頷く。

「じゃあ、淑妍さまは、昔は宮殿にお勤めしてらしたんですね」

自分の予測が的中し、莉彩は嬉しくなった。

後宮で働く女性一女官は皆、上は尚宮から下は下働きの下女まで国王のもので、結婚も叶わず一度入宮したら死ぬまで暇を取ることはできない。

後宮にはあまたの女性がひしめいているけれど、その中で国王の眼に止まり、お褥に侍ることができるのは、ほんのひと握りの幸運な女人だけ、その他大勢は顔すらろくに見たこともない王に操を立てて一生を無為に過ごさねばならない。

それはつまり、後宮の女なら誰もが王の所有物であるという建て前があるからに他ならない。そのため、女官は「人知れず咲いて散る花」と謳われ、ひっそりと花開き、花の盛りを誰にも愛でられることない憐れな宿命だといわれていた。母に誘われて何度か見たドラマで、後宮の女官がたった一人で婚礼を挙げているのを見て不思議に思ったことがある。しかし、その理由は直に判った。

国王の女である女官は、生涯誰にも嫁がず、王をただ一人の良人として貞節を守りながら過ごす。ゆえに、後宮の女官が上げる婚礼というのは新郎不在で、花嫁ただ一人が良人たる王に生涯の貞節を誓う、いわば誓いの儀式なのだ。

華やかなはずの婚礼に何とも悲壮な雰囲気漂っているような気がしたのは、そのせいだったのだ。

「何故、宮殿を下がられたのですか」

「自分の役目が既に終わり、私が宮殿にいる必要がなくなったと自身で判断したからです」

「そうなのですか」 莉彩はしばらく考えに耽った。しばらくして、弾かれたように面を上げる。

「淑妍さま、私にどこか働き先を紹介して貰えませんか」

「一」

流石に淑妍は声がなかった。

「折角の機会なので、色々な経験をしてみたいです。それに、いつまでもこちらのお屋敷にご厄介になっているわけにもゆきませんし」

あの男が淑妍にどこまで話しているのかは判らないが、大方、淑妍はすべての事情を察しているに相違ない。

実のところ、莉彩はいつまでもこの屋敷にはいられないと思っていた。淑妍もその弟の臨内官も優しい人たちだけれど、臨内官の奥方はなかなか気性が烈しい女性だ。莉彩は一、二度しか逢ったことはないが、初めは良人の臨内官が屋敷内に困った側妾だと勘違いされ、物凄い眼で睨まれた。

夫婦とはいえ、良人とは交わりのできぬ宿命だ。むろん、夫婦は閨の関係だけではない。長の年月を共に寄り添い合って歩みながら、信頼関係と絆を築いてゆけば良いだろう。が、覚悟して嫁ぐとはいっても、健康な女性であれば辛いこともあるはずだ。その長年、溜まりに溜まった鬱憤が夫人の気性を余計に撓め歪ませているのかもしれない。考えてみれば、宦官の妻というのも哀しい立場ではあった。

今でも夫人が自分の存在を疑いの視線で見ていることは知っている。淑妍や臨内官はともかく、あの女性は莉彩に一日も早く、出て行って欲しいと願っていることだろう。

「夫人（ピン）のことですね。あの人も悪い方ではないのですが、やはり内官の妻というのも辛いものがあるのでしょうか。私と同様、夫人も子を生み育てるといふ女としての愉しみを味わえなかったのですから」

淑妍はどこか淋しげに微笑むと、頷いた。

「でも、淑妍さまは、あの方の乳母だったとお聞きしましたが」

言ってしまうってから、ハッとした。

「済みません。私ったら、余計なことを」

乳母を務めたからには、当然結婚もして子を生んだのだとばかり思い込んでいたのだが、どうやら、それは見当外れだったようだ。

淑妍は笑って、かぶりを振った。

「良いのですよ、私は乳母とはいっても、保母尚宮としてお仕えしたのです。つまり養育係です。お乳を差し上げた乳人は別にちゃんといたのですが、あの方が乳離れされたときに宮中を退かれました。まだ幼いお子をお家に残されてのご奉公ゆえ、致し方なしと認められて円満に退かれたのですわ」

淑妍が遠い瞳で語った。

「あの方が三歳のときにお側に上がってから、以来、十七年、宮殿におりました。畏れ多いことですが、子のおらぬ私にとっては、あの方が我が子のようなものです」

淑妍はそう締めくくると、莉彩に告げた。

「先刻のお話ですが、どうでしょう、いっそのこと、宮中にお仕えしてはいかがですか」

「宮中一、それって、もしかして後宮の女官になるということですか？」 莉彩が眼を丸くすると、淑妍は笑った。「そのとおりです。あなたの場合は事情が事情ですから、一般の女官とは違い、止めたいと思ったときに止めることができます。もし、その気があるのなら、私から提調尚宮（チェジョサンゲン）に手紙を書きます。それを持って後宮に上がれば、すべては上手くいきますよ。手筈はすべて私が整えます」

提調尚宮とは、いわゆる後宮女官長であり、後宮の最高責任者である。随分前に退出したとはいえ、後宮女官長と知己だということからは、やはり淑妍は後宮で重きをなしていたのだろう。

「莉彩、私からもお願いが一つあるのです」

真摯な視線を向けられ、莉彩は思わず居住まいを正した。

「淑妍さまには何から何までお世話になりました。その恩義あるお方のお願いとあれば、私でできることなら、何でもします」

「ありがとう」

淑妍は淡く微笑むと、もうすっかり冷めてしまった香草茶をひと口含んだ。

「もう冷えてしまったでしょう。すぐに淹れ直します」

莉彩がすかさず湯呑みに手を伸ばすと、淑妍はそれを手で制した。

「あの方は、日々、お心淋しく過ごしておられます。莉彩は利発で物覚えも良い。それに、心根も優しい娘ゆえ、こうして頼んでいます。どうか宮殿に上がったら、あの方のお力になって差し上げて下さい。この香草茶は実は、あの方がお好きなものなのですよ。宮殿にいる時分は、よくこれをご所望になり、私が淹れて差し上げました」

「淑妍さま、あの方は王族のお一人でいらっしゃるのですね？ 身分の高いお方だとは思っていましたが、まさか宮殿にお住まいの王族だとは考えてもみませんでした」

莉彩が無邪気な感想を述べるのに、淑妍は、ただ静かに笑っているだけだ。

「判りました。いつまでいられるかは判りませんが、精一杯、淑妍さまのご期待に添うように努力します」

莉彩は力強く頷いた。

「頼もしい言葉を聞けて、私も嬉しく思います」

淑妍が微笑む。眼の前の卓には器に美しく盛られた揚げ菓子があった。淑妍はそれを一つつまむと、莉彩に差し出す。

「さ、遠慮しないで、お食べなさい。先刻から食べたいのに、私に遠慮して我慢していたのでしよう」「へへ、ばれちゃいましたか」

莉彩は肩をすくめ、ペコっとお辞儀をして揚げ菓子を受け取る。現代にいるときも、この時代に来ても、甘いものには眼がない莉彩であった。いかにも幸せそうに菓子を頬張る莉彩は、まだ十六歳の少女らしく、あどけない。そんな莉彩を淑妍は婉然と微笑んで眺めていた。よもや、淑妍の中にさる思惑が潜んでいようとは、この時、莉彩は知る由もなかった。

その数日後、莉彩は慌ただしく臨内官の屋敷から宮殿に移った。既にこの時代に来てから、ひと月余りが経っていた。入宮後まず行われたのは、何と婚礼であった。この時代、韓国では婚礼のことを嘉礼（カレ）と呼ぶ。むろん、後宮女官の掟にのっとり、花婿のいない、花嫁だけの結婚式だ。テレビで見たときも、何とも侘びしいものだと思ったものだけれど、現実に関自分が直面してみると、侘びしいどころではなかった。

韓国の伝統である花嫁衣装を身につけ、飾り立てた祭壇に向かい、恭しく拝礼し、日本で言う三三九度一夫婦固めの杯を口にする。

拝礼は両手を上に向けて重ね合わせ、まずは眼の高さまで持ち上げ、座って一礼する最高礼である。重たい婚礼衣裳に身を包んでいるため、一人で所作が上手くできない。ゆえに、両脇から介添えの女官に支えられ、何度かの拝礼を終えるのだ。

婚礼とは、本来めでたいものなのに、まるで通夜のようなこの暗い沈んだ雰囲気はどうだろう。それはやはり、この儀式を終えた女官は正式に王の所有物と見なされ、生涯誰にも嫁ぐことなく、あたら花の盛りを無為に咲く徒花となることを義務づけられるからに違いない。

この日を境に、嘉礼を済ませた女官は一人前として認められ、誰にも愛でられることなく、ひっそりと咲いて散る花となる宿命を背負うことになる。

この時代からはるか後の現代に生きる莉彩にとっては、全くナンセンスな話だと思うが、昔はそれがごく当たり前の考えであったのだろう。現に、日本の江戸時代においても江戸城大奥に奉公する奥女中は上から下まで将軍一人に操を立て、大奥にいる限りは生涯「お清、を通す」という掟があった。国は違えども、どこも封建社会の仕組みは似たようなものなのかもしれない。

この時代に飛ばされてきて、莉彩は色々なことを見、知った。二十一世紀の日本に生きる自分は、とても幸せなのだと改めて思った。同時に、過去と現在の違いを知るにつけ、色々なことを考えるようになった。両班と呼ばれる貴族や王、王族たちというごく一部の特権階級に属する人々だけが絹を纏い、食べきれないような量のご馳走を口にする。裏腹に庶民は幾ら働いても、その日のお米さえ満足に手に出来ない。ごく少数の上層階級だけが享楽と利を貪る世の中は、どこか間違っている。

でも、莉彩には、世の中を動かしたり変えたりする力はない。この時代よりはるか後の時代に生きる、ただの無力な高校生にすぎない。それが何とも口惜しくはあったけれど、二十一世紀に帰ったら、莉彩はもっと一生懸命勉強しようと思った。

大学に進んで、福祉の勉強をして将来は介護関係の仕事につきたいと思うようになったのだ。これまで目標や夢もなく、ただ何となく学校に行き、何となく勉強したり遊んだりしていた自分が凄く恥ずかしかった。社会を変えるような大層なことはできないけれど、弱い立場のお年寄りを助け、少しでも老後を快適に過ごせるようにサポートすることなら、自分にもできるかもしれない。

慎吾とのことも、やはりこのままではいけないと思うようになった。相手の優しさや寛容さに付け込み、その気があるような素振りを見せるのは卑怯だ。こちらが現代に戻れたら、自分の想いをきちんと誠意をもって告げ、二人の関係を見直してみる必要があるだろう。

莉彩が折しも固めの杯を口にしようとしたその時、はるか遠方を賑々しい行列が通りかかった。朱塗りの綺羅綺羅しい輿に乗っているのは、まさに国王その人である。輿の前後をあまたの内官や尚宮、女官が付き添い、行列は静々と進んでゆく。

ふいに、その行列が止まった。緊張しっ放しで儀式に臨んでいる莉彩には、そんな一切は眼に入っていない。嘉礼を行っている様子を遠くから見かけ、王が脚を止めたのだ。

「あの者は誰だ？」

傍らに畏まって控える内官に訊ねた王に、恭しい返事が返ってきた。

「本日、嘉礼を行っておりますのは臨女官でございます」

「臨女官とは一」

物問いたげな王に向かい、今度は王付きの尚宮が丁重に応えた。

「はい、四日前に臨尚宮の紹介で入宮致しました臨莉彩（イムイチエ）でございます」

「おう、そうであったか。そう申せば、あの者が乳母の養女として入宮としたと耳にしておった」「国王殿下（チュサンチョナー）は臨女官をご存じでいらっしゃいましたか？」

尚宮が愕いた表情をするのに、若い王は笑った。

「まあ、な」

嬉しげに嘉礼を見つめる王の横顔を、内官と尚宮が意味ありげな顔で見つめ合う。それは、
`殿下のご執心なさる女官が新たに現れた、という無言の事実確認であった。

「輿をもっと近くまで移動させよ」

鶴のひと声で、王の乗った輿はまた静々と進んだ。お付きの者たちもまたぞろぞろと付き従う。
物陰に輿を止めさせ、王は愉快そうな表情で厳粛に執り行われる儀式を見物している。

と、突然、王が輿を降りようして、傍らの内官は狼狽えた。

「殿下、どうなさるおつもりにございますか」

「臨女官の許にゆく。丁度、固めの杯を呑んでいるところではないか、花婿のおらぬ婚礼は淋し
かろう。予が参って、その役を果たそう」 事もなげに言う王を、尚宮が大慌てで止めた。

「なりません、殿下。後宮の女官は皆、おしなべて殿下のものであるという大前提に嘉礼は行わ
れます。あまたの女官は皆、誰もが殿下のご寵愛を頂くことを夢見ているのでございます。女官
の嘉礼は新婦一人で行うのが通例、それを臨女官にのみ殿下がご臨席あそばされては、他の者た
ちに示しがつきませぬ」

尚宮の諫めはもっともであった。私情に溺れて、公私混同するほど愚かな王ではない。

王は不満げに押し黙ったが、その表情には明らかに落胆が滲んでいた。

「後宮に仕える女官が予のものだと申すのなら、予が女官の嘉礼に新郎として出席しても一向に
構わぬと思うのだがな」

それでもまだ小声で呟く王を、年配の尚宮がキッと睨む。王はまるで悪戯を見つけた幼児
のように肩をすくめ、それきり口を噤んだ。

霜月下旬とはいえ、その日、日中は動けばうっすらと汗ばむほどの陽気だった。年若い王は
、盛装した臨女官を眼を細めて眺めている。その視線が何となく熱っぽく、眩しげに見えたのは
、満更、陽光の眩しさだけではなかったろう。その後も、嘉礼が終わるまで、王はその場所か
ら動かなかった。

その二日後。

莉彩は直属の上司である崔（チェ）尚宮から言いつけられた洗濯を済ませ、更にその後すぐに生果房（王や王妃たちに出す食材を賄う部署）まで崔尚宮の言づてを届けにいった。それは、今夜の王にお出しする御膳のデザートの変更であった。栗を出す予定だったのを、急遽、干し杏子に代えるというものだ。

崔尚宮は臨尚宮とも面識があるといい、年の頃は四十前後のもの柔らかな女性である。偉い女官となると、皆、怖くて威張っているおばさん（？）＝お局さまを想像していたのだけれど、崔尚宮はどちらかといえば臨尚宮と似たようなタイプだ。

もともと、失敗したときには、容赦なく手厳しく叱責されたが、後を引くようなことはない。大体、莉彩は礼儀作法からまず憶えなければならぬため、日々の仕事に加え、暇があると崔尚宮の部屋に呼ばれて、猛特訓を受けることになった。そのため、莉彩のスケジュールは物凄くハードだ。これでは、しばらくどころか、いつ自由時間を持てるようになるのか知れたものではない。

だが、何でも興味津々の莉彩にとっては、様々なことを習い憶えるのは愉しくてならなかった。考えてみれば、今、莉彩が体験していることはすべて、日本の女子高生である彼女が体験できるようなことではない。それが、何の因果か現代の日本から朝鮮王朝時代の韓国に飛ばされ、得難い体験をしている。

初めてこの時代に来たときには、絶望で奈落の底に突き落とされたように思ったが、今では、これも貴重な人生勉強だと思えるようになった。

むろん、帰るのを諦めたわけではない。莉彩の居場所はいくまでも二十一世紀の日本にあるのだ。父や母、慎吾を初め、泰恵や遥香の待つふるさとに一日も早く帰りたいという想いは変わるはずもない。突然、姿を消した自分が現代でどのように思われているのか。両親は心配して食事も喉を通らない状態が続いているかもしれない。それを考えただけで、心配で叫び出しそうになったが、今ここで、それを考えていても仕方ない。

いずれ時が満ちれば、ひと月余り前に時空の扉が突如として開いたように、この時代とあちらの時代が重なり、再び現代に戻ることができるかもしれない。その一方で、このまま手をこまねいていても良いのかという想いはあった。

十六歳という柔軟な思考力を持つ年頃、更に生来の聡明さもあって、莉彩は教えられたことは乾いた砂が水を吸い取るように、どんどん吸収してゆく。今はとりあえずは宮廷での生活に慣れることを心がけることに専念しようと思った。そうすれば、幾ばくかでも心が紛れるだろう。

その日、莉彩はリラの花の簪を挿していた。女官は皆、同じデザインの服一お仕着せを支給される。紅が入ってはいるが、全体的に地味なチマチョゴリだ。髪型は後ろで二本の三つ編みに編み、くるくるっと巻いて飾りで束ねる。実用的で動きやすい形だ。

やはり、王の後妃たちの服装は、これに比べると、かなり派手できらびやかならしい。一らしいというのは、莉彩はまだ王も王の後妃にもお目通りしたことがないからだ。それに、現王は三十歳だというが、目下のところ、正式な后妃は一人としていない淋しい身の上だという。お手つきの女官はいないこともないらしいが、夜のお相手を務めたのはせいぜいが二、三度で、そんな女たちからは「主上（サンガンマーマ）は薄情なお方、と恨まれているようだ。かといって特に王が好色というわけでもなく、今の後宮は中殿（王妃・チュンジョン）や妃嬪（側室）が王の寵愛を競い合うこともなく、至って波風立たぬ平穏だ。ただ、唯一の嵐の目は、王の義母に当たる大妃（タービ）の存在である。

金（キム）大妃は先王の中殿、つまり正室だ。現在、六十近い高齢だが、病知らずでかくしゃくとし、今も大妃殿で隠然たる勢力を誇っている。

王は昔から、この大妃と犬猿の仲であった。現王徳宗（ドクジョン）は先王の側室の一人である淑儀（スウギ）から誕生、身分の低い側室からの出生である王を大妃は厭い、長らく世子（セジャ）とすることに異を唱えていた。しかし、先王はあまり子宝には恵まれず、中殿金氏はまだ世子嬪（王太子妃・セジャビン）時代に一女をあげたものの、生後まもなく早世、その後は懐妊することはなかった。

王子四人、翁主（王女）三人の中、成人するに至ったのは何と王位を継いだ徳宗のみであった。徳宗の生母は徳宗がまだ六歳の砌に若くして亡くなっている。生きていれば、王の実母としてさぞかし時めいたであろうが、時に宿命とは弱き者には苛酷なものである。淑儀は我が子が王座に就くどころか、世子に冊立されるその晴れの日すら見ることなく、王妃にいびられながら失意の中にこの世を去った。まだ二十四歳の若さだったという。

とにかく、このなさぬ仲の母子は仲が悪かった。王が何かしようとするれば、必ず大妃から横やりが入る。意地になった王は余計に己れの意見を通そうと躍起になる。一といった案配で、この果てしない親子喧嘩は延々と続いている。

莉彩は水果房に崔尚宮の伝言を確かに伝え、足どりも軽く来た道を引き返した。その途中、向こうからぞろぞろと歩いてくる一団に遭遇する。

お付きの内官が大きな緋色の天蓋を高々と掲げているところを見ると、どうやら国王殿下のおなりらしい。宮殿内は途方もなく広いため、王は移動の際、輿を使うことが多いのだが、今日は歩いての移動といったところか。

緋色は高貴な色、許された者のみが纏う色である。例えば、王と大臣と呼ばれる高官たちだ。

莉彩は咄嗟に脇に身を寄せ、深々と頭を下げた。莉彩のような新参の女官一しかもまだ見習いの身では、王の尊顔を拝し奉ることも恐れ多いのだと崔尚宮から教えられた。

賑々しい一団が次第に近付いてくる。行列がまさに眼の前を通り過ぎようとしたその一瞬、鋭い誰何の声が頭上から飛んできた。

「そなたは、どなたにお仕えする女官だ？」

思わず身を強ばらせ、震える声で言上する。

「崔尚宮さま（チェサングンマーマ）にお仕えしております」

「たかだか一介の下働きがそのような高価な簪を身につけるとは、宮廷でのしきたりを侮っているのか！」

どうやら、王付きの尚宮に咎められてしまったらしい。王付きの劉尚宮（リュウサングン）は謹厳なことで有名だ。曲がり角を曲がる時には、角に添って定規で線を引くように曲がるという話は、融通の利かぬ劉尚宮の逸話として誰もが知っている。

臨尚宮や崔尚宮とはまさに正反対のタイプだろう。

「崔尚宮は一体、女官にどのような躰をしておるのだ。全くもって嘆かわしい」

そこに上司の名まで持ち出され、莉彩は狼狽して、その場に平伏した。

「どうかお許し下さいませ。まだ入宮して日も浅く、私の落ち度にございました。崔尚宮さまには何の拘わりもございませぬゆえ。どうか、今度ばかりはご容赦下さいませ」

大殿（テージョン）、つまり王のお住まいになる宮の尚宮と一般の尚宮では立場が断然違う。しかも劉尚宮は、副提調尚宮（副女官長）も兼務している。この後宮では提調尚宮の次にいるナンバーツーなのだ。よもやとは思うけれど、自分の愚かな粗相のために、崔尚宮にまで累が及んではと一瞬、焦ったのである。

「劉尚宮、まあ、良いではないか。本人も入宮して日が浅いと申しておる。まだ新参の身でありながら、上司を庇うとは、なかなか優れた心映えを持つのだな。その方、名を何と申すのだ」

劉尚宮の背後から、王の穏やかな声が聞こえた。

刹那、莉彩はハッとして顔を上げてしまった。その瞬間、王と莉彩の眼が合う。

「何と無礼な。殿下のご尊顔を許しも得ずに拝し奉るとは」　　またまた、これが劉尚宮の怒りを煽ったらしい。「も、申し訳ございませぬ」

莉彩は再び平身低頭した。頭を地面にこすりつけんばかりに下げる。

「何だ、莉彩ではないか。道理で、どこかで見た女官だと思ったぞ。どうだ、少しは新しい暮らしに慣れたか？」　　親しげに問われ、莉彩は慌てて頷いた。

「は、はい。せ、聖恩の限りにございまする」

崔尚宮から教え込まれた科白を口にするのと、朗らかな笑い声が響き渡る

。「劉尚宮、予は少しこの者と話がしたい。そなたらは下がっておれ」　　命じられた劉尚宮は土下座したままの莉彩をひと睨みし、内官や女官を引き連れ、少し離れた場所に移動した。

王が手を差しのべ、莉彩の手を無造作に取った。

「ここでは、やはり人眼が気になる。ゆこう（カジャ）」

いきなり走り出した若い二人を、皆が呆気にとられて見つめている。むろん、劉尚宮も苦々しげな顔で見送った。　　人気のない庭園の一角まで来て、王は漸く立ち止まった。それでも、王はまだ莉彩の手を放そうとはしない。荒い呼吸をしながら、莉彩は消え入るような声で言う。

「殿下、手を一お放し下さい」

「何ゆえ、そのように急に畏まる。出逢ったときのように、威勢良くなくては莉彩らしいくないぞ？」

王は笑いながら、やっと手を放してくれた。

「まさか、あなたさまが国王殿下だとは思いません、ご、ご無礼の一」

緊張と愕きに思わず声が上ずり、あまりの情けなさに涙が零れた。

あまりにも迂闊だったと思う。よくよく振り返れば、宮殿に住めるのは、まだ成人前の若い王子だけで、一人前になれば王子たちは皆宮廷を去り、王子宮を構えるのがならいだ。なのに、
「あの方、を単なる王族の一人だと思い込んでいた自分はやはり劉尚宮のいうように、とでもない粗忽者だ。

「一泣いているのか？」

ふいにすぐ真上から声が降ってきたかと思うと、莉彩の身体はふわりと抱き寄せられた。

莉彩は我が身に起こったことが到底信じられなかった。

これは夢一？ 覚めるのが勿体ないと思ってしまうほどのステキな夢なの？

「いいえ、泣いてなどおりませぬ」

そう言いながらも、声が震えるのはどうしようもない。

王がかすかに含み笑いを洩らした。懐からそっと手巾を取り出し、莉彩の涙をぬぐってやった。

「そなたが泣くと、予はどうして良いか判らなくなってしまうのだ。だから、もう泣くのは止める」
初めてこの世界に来たそのときから、ずっと優しくしてくれた男（ひと）だった。でも、いまだにこの男の面影が胸の内から消えないのは、多分、生命の恩人だからというだけじゃない。

莉彩は心で思った。

「わたしは、このひとのことがきっとすきなんだ。

「好き、という短いフレーズを口の中で転がしてみる。すると、それは一瞬の中にふわふわとした綿菓子のように溶けてひろがる。切ないけれど、幸せな気持ちだった。慎吾を想う時、こんな気持ちになったことは一度もなかったのに。この瞬間、莉彩は、はっきりと認識した。慎吾への気持ちは、恋ではなかったことに。そして、恐らく、この男とめぐり逢ったときから、真実の恋が既に始まっていたことに。だが。

この想いは永遠に実ることはないだろう。まず第一に、莉彩はこの時代の人間ではない。本来であれば、この世界に属すべき人間ではなく、いてはならない人間なのだ。いずれ現代に帰ることになる莉彩に、この時代に生きる男を好きになる資格はない。

次に、莉彩が生まれて十六年で初めて恋に落ちたひとは、国王殿下だった。仮に莉彩がこの時代、はるかな過去で生きてゆく決意をしたとしても、この男と自分が結ばれる可能性は皆無に等しい。

ありきたりな言葉、理由ではあっても、二人の間に立ちはだかる厚い壁は「身分違い」という名の障害であった。泣くまいと思えば思うほど、涙は堰を切ったように溢れ出してくる。

「宮廷での暮らしは、それほどに辛いのか」

王の声もまた辛そうだ。莉彩は泣きながらも、小さく首を振った。

「いいえ、崔尚宮さまはお優しいし、色んなことを教えて下さいます。新しいことを憶えるのが愉しくて、毎日、時間が飛ぶように過ぎてゆきます」「そうか、それは良かった。莉彩。その髪飾り、よく似合っているぞ」

王が莉彩の髪にそっと触れた。ほんの少し触れただけなのに、そこだけがまるで熱を持ったように熱い。

「恐れ入りましてごさいます（ハンゴンハオニダ）」

莉彩がまたも憶えたての常套句を口に乘せると、王は笑った。「もう、良い。莉彩。そなたの前では、予は国王でも何者でもない。ただの一人の男だ。そのように畏まられると、予の方が哀しくなるではないか」

王は半ば戯れ言めいて言い。

「予と二人だけで逢うときには、また、その髪飾りを付けてきてくれ」

その言葉に弾かれたように顔を上げると、王の屈託ない笑顔があった。互いの呼吸すら聞こえそうなほどの近さに、ドキリと心臓が跳ね上がる。

「明後日の晩、ここで再び逢おう」

「—！」

何か言おうとしたが、その言葉はふいの口づけで遮られた。鳥の羽根がかすかに触れるほどの接吻、それでも、莉彩にとっては初めてのキスだった。

莉彩が我に返った時、既に王の姿はその場にはなかった。赤や黄金色に染め上がった庭の樹々がただ静かに晩秋の風に吹かれているばかり。十一月も下旬に入り、樹々も半ば葉を落とし、落ち葉に埋め尽くされた地面はまるで鮮やかな絨毯を敷きつめたようだ。莉彩の手に、一枚のハンカチが残された。そっと手のひらにひろげてみる。

純白のハンカチの片隅に紫の花が縫い取られている。

「もしかして、これはリラの花？」

思わず声に出して叫んでしまって、慌てて口を押さえる。

王がこのハンカチを持っていたのは単なる偶然だろうか。　思わず期待に胸がときめきそうになり、思わず自分を叱る。　あの方はけして愛してはいけない男。どんなことがあっても、この感情（おもい）を表に出してはならない。

でも、心の中でそっと想うくらいなら、許されるのではないだろうか。　そう言い訳しながら、莉彩は白いハンカチを握りしめる。

一莉彩、その髪飾り、よく似合っているぞ。　劉尚宮に叱責を受けた莉彩を慰めるつもりで言ったのかもしれない。それでも、好きな男に賞められて、莉彩は嬉しかった。　晩秋の風が通り抜けてゆく。　音もなくはらはらと散る紅い葉を、莉彩は幸福な想いで眺めた。